

地域体育における施設経営に関する研究(3)

—— 卓球・バドミントン開放の指導者について ——

中 村 平

< 緒 言 >

本研究は、究極的には地域における運動施設の望ましい体育経営のあり方を明らかにすることをめざしながら、当面は、運動施設が実施している体育事業の一種類であるエリア・サービスに焦点を当て、その望ましいあり方を探ろうとするものであり、一昨年及び昨年の研究に続くものである。

これまでの研究では、指導者を配置してエリア・サービスを実施することは、運動者の要求に合うだけでなく、運動者行動（特に、利用距離、利用頻度）を、体育事業を提供する体育経営体にとって良いものにすること、さらに、トレーニング・ルーム利用者については、指導者が指導活動を行うことによって利用者の自主性を育成すること、即ち、指導者に依存せずに活動が行える利用者にすることが可能であること、そのための指導内容としては、特に女子にとってはマナーや協力的態度に関する内容が有効であること、しかし一方、指導者側から利用者への積極的指導は完全な自主性の育成にはつながりにくいこと等を明らかにしてきた。

そこで本研究では、運動施設が実施するエリア・サービスの種目としては最も一般的と考えられる卓球とバドミントンをとり上げ、どのような利用者がどのような指導によって自主性を育成されているかを明らかにしながら、運動者行動にも注目し、自主性の有無及び自主性の育成と運動者行動とはどのような関係があるか、さらに、もともと自主性のある者とそうでない者とは主体的条件において何が異なっているか、についても合わせて明らかにしたいと考える。なお、その際、必要に応じて昨年のトレーニング・ルーム利用者に関する研究結果との比較を行いたいと考える。

< 研究方法 >

昨年の研究とほぼ同様ではあるが、対象種目が異なることや新たな分析上の観点を取り入れたことから、重複はあるが再度示すと次のようになる。

まず、もともとの自主性の有無については、指導者の必要性の有無及び指導を受けたいと思うかどうかに基づいて判断した。したがって、自主性のない者がイコール意欲的でない者ということではなく、自主性のない者は指導を求めている者であり、そのような者は、例えば「も

っと上手になりたい」というように、運動への取り組み方がむしろ意欲的あるいは積極的といえるかもしれない、といった点に十分配慮して分析、さらには結果の活用に当たらなければならないと考える。

また、自主性の育成については、指導を受けた結果利用者に生じた変化によって次のように分類した。

- I) 自主性が育成されたと考えられる者……例. 他の運動施設も利用するようになった者。指導を受けない日が多くなった者。
- II) 体育経営としては好ましいが、自主性が育成されたと判定できない者……例. 利用頻度が高くなった者。利用時間が長くなった者。
- III) 自主性が育成されなかったと考えられる者……例. もっと指導を受けたいと思うようになった者。

指導については、指導方法と指導内容を取りあげ、指導方法に関しては、利用者からの求めに応じた指導と指導者側からの積極的な指導との2つに分類し、指導内容に関しては、利用者が受けた内容を次のように5つに分類した。

- A) 運動の技術に関する内容
- B) 練習方法に関する内容
- C) ルールや審判法に関する内容
- D) マナーや協力的態度に関する内容
- E) 日常生活での運動の行い方等の体力に関する内容

さらに、運動者行動については、利用距離（本研究では施設までの所要時間を用いた）、利用時間、及び利用頻度を取り上げた。

なお調査は、独立的体育経営体としての2つの公営体育館で実施されているバドミントンと卓球の3つのエリア・サービス（一般開放、個人開放）の利用者に対し、質問紙による調査を行い、男子188名、女子221名の回答を得た。これらの中から、クラブやサークルの練習として利用している者及び利用目的が不明の者を除外して、本研究の有効標本とした。

結果の処理については、指導内容及び自主性の育成に関しては、利用者は多様な指導を受け、かつ、その結果として多様な変化を起こしているために、指導内容30類型、自主性の育成7類型の組み合わせで分析することが特徴をより明白にし望ましいとは考えるが、それだけの類型数に耐え得るだけのサンプル数がないこと、及び昨年の研究との比較の意図もあることから、本研究においては、それぞれ重複を認めて5類型及び3類型とし、2×2分割表によるカイ自乗検定（理論度数が5以下の場合にはYatesの修正）を行った。

< 結果及び考察 >

1) 自主性の有無と主体的条件

まず、もともと自主性のある者とそうでない者とは、主体的条件において何が異なるかについてみた結果、次のようなことが明らかになった。即ち、男子では、勤め人はもともとの自主性がないほうに多く、学生時代にクラブ活動を経験した者はもともと自主性があるほうに多

くみられた。さらに、現在、他の運動施設へも出かけて運動している者は、もともとの自主性がないほうに多くみられた。また女子については、主婦はもともと自主性なしのほうに多いといったように、男女ともいくつかの主体的条件に関して5%水準あるいは1%水準で有意差がみられた。

さらに、男女共通に有意差のみられた条件としては年齢、利用仲間、及び利用のきっかけの3条件があった。即ち、表1及び表2にみられるように、男子では、19歳以下は「もともとあり」のほうに多く、20歳以上は「もともとなし」のほうに多いこと、女子では、29歳以下は「あり」に、30歳以上は「なし」に多いことがわかる。また利用仲間については男女とも、一人で来た者は「なし」に多く、二人以上で来た者は「あり」に多く認められた。さらに、利用のきっかけについては、男女とも、広報やチラシを見て利用した者は「もともと自主性なし」のほうに多いことがわかった。

以上のほかにもいくつかの主体的条件に有意差が認められたが、これらの条件のうち学生時代の運動経験と現在の運動状況を別にすれば、他の有意差のあった条件は年齢と利用仲間の2

表1 もともとの自主性の有無と年齢

性 有無 f %	男				女			
	あり		なし		あり		なし	
	f	%	f	%	f	%	f	%
～ 14	5	7.7	4	4.7	3	9.4	1	0.7
15 ～ 19	26	47.7	17	24.7	7	31.3	14	10.3
20 ～ 24	8	60.0	23	51.8	8	56.3	25	27.4
25 ～ 29	13	80.0	15	69.4	4	68.8	10	34.2
30 ～ 39	6	89.2	14	85.9	6	87.5	56	72.6
40 ～ 49	6	98.5	6	92.9	4	100	28	91.8
50 ～ 59	1	100	6	100			10	98.6
60 ～							2	100
計	65		85		32		146	

%は累積度数のパーセント

表2 もともとの自主性の有無と利用仲間

性 有無 f %	男				女			
	あり		なし		あり		なし	
	f	%	f	%	f	%	f	%
一人 で	6	9.1	20	23.3	2	6.3	32	21.2
二人以上で	60	90.9	65	75.6	30	93.8	117	77.5
N・A			1	1.2			2	1.3
計	66		86		32		151	

条件に集約できると考えられる。つまり、指導者の立場からは、男子の20歳以上、女子の30歳以上、そして男女とも一人で来た者については「もともとの自主性がない」、即ち指導を受けたいと思っていると考えればよいということである。ただ、表2からもわかるように、二人以上で来たからといって「もともと自主性がある」と判断することはできないといった点は残るが、少なくとも、エリア・サービスの指導者としては一人で来た利用者、さらに男子20歳以上、女子30歳以上の利用者は、指導を欲していると考えて仕事にあたるべきである、といったよいかと思われる。

2) 指導内容・指導方法と自主性の育成

まず、利用者が受けた指導内容を全般的にみてみると、ルールや審判法の指導及び体力に関する指導を受けた者が極めて少数であり、圧倒的に多いのが技術指導、次いで練習法の指導であり、マナーや協力的態度に関する指導を受けた者が30%弱であることがわかった。このこと

表3 マナーや協力に関する指導と自主性の育成(M. A)

性 有無 育成 f %	男				女			
	受けた		受けない		受けた		受けない	
	f	%	f	%	f	%	f	%
I	9	75.0	10	31.3	21	72.4	29	33.0
II	8	66.7	13	40.6	20	69.0	48	54.5
III	2	16.7	14	43.8	9	31.0	34	38.6
計	12		32		29		88	

- I : 自主性が育成されたと考えられる者
- II : 体育経営としては好ましいが自主性が育成されたとは判定できない者
- III : 自主性が育成されなかったと考えられる者

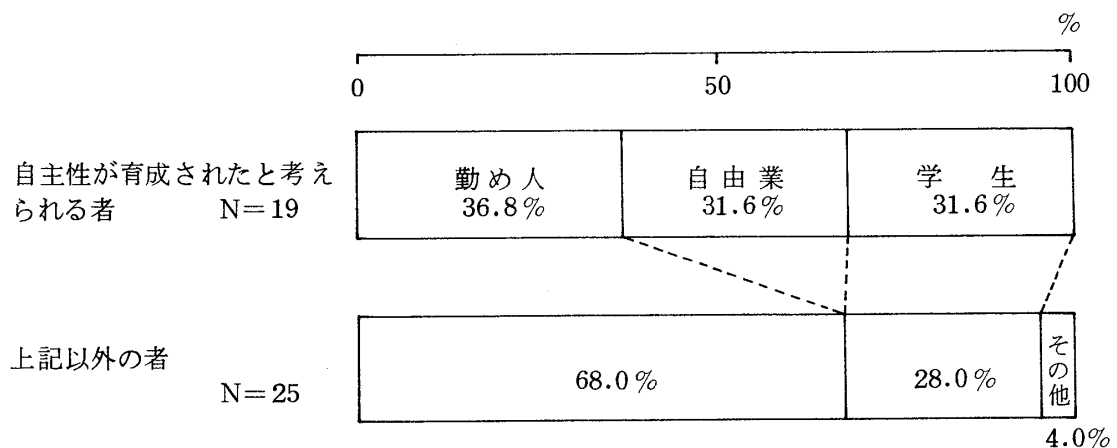


図1 自主性の育成と主体的条件(職業) 男子

自体は、現在のエリア・サービスにおける指導の実態を顕著に物語っているとも言えようが、自主性の育成との関係で興味ある結果もいくつかみられた。

即ち、表3にあるように男女とも、自主性が育成されたという育成Iとマナーや協力的態度に関する指導との間には、それぞれ1%、0.1%水準で有意な関係が認められた。そこで、育成Iの者とそれ以外の者との主体的条件の比較を行った結果、いくつかの条件に有意差が認められたが、それらの条件の違いのために育成Iとマナーや協力的態度に関する指導との間に有意な関係が生じているのではないことも明らかになった。このことにより、特に女子については昨年と同じ結果が得られたことになり、トレーニングとバドミントン・卓球という種目の違いはあっても、マナーや協力的態度に関する指導が自主性の育成に有効であることが明らかにされたといえる。

また、男子については、表4及び表5にあるように、体育経営としては好ましいが自主性が育成されたとは判定できないという育成IIと練習法の指導との間に、さらに、自主性が育成されなかった育成IIIと技術指導との間に、それぞれ5%水準で有意な関係がみられた。これらについても育成Iの場合と同様に主体的条件の比較を行ったが、5%水準での有意差が認められなかったために、育成IIと練習法の指導、育成IIIと技術指導の関係はそれぞれ依然として有意であると考えた。

結局、少なくともマナーや協力的態度に関する指導と育成Iとの間には、男女とも有意な関

表4 練習法の指導と自主性の育成 (M. A)

育成	性 有無 f %	男				女			
		受けた		受けない		受けた		受けない	
		f	%	f	%	f	%	f	%
I		5	41.7	14	43.8	22	38.6	28	46.7
II		9	75.0	12	37.5	37	64.9	31	51.7
III		7	58.3	9	28.1	23	40.4	20	33.3
計		12		32		57		60	

I～III：表3に同じ

表5 運動技術の指導と自主性の育成 (M. A)

育成	性 有無 f %	男				女			
		受けた		受けない		受けた		受けない	
		f	%	f	%	f	%	f	%
I		13	40.6	6	50.0	34	44.2	16	40.0
II		14	43.8	7	58.3	48	62.3	20	50.0
III		15	46.9	1	8.3	27	35.1	16	40.0
計		32		12		77		40	

I～III：表3に同じ

係がみられたことになるのであるが、前述のようにマナーや協力の指導を受けた者が30%弱ということもあってか、それらの指導だけを受けて自主性が育成された者はほとんどいない状態であった。したがって、ここでは、他の指導内容に加えてマナーや協力に関する指導をすることが自主性の育成には有効なのではないか、と考えるべきであろうと思われる。

さらに、そのようなマナーや協力的態度に関する指導はどのような利用者に有効かについて

表6 マナーや協力に関する指導と自主性の育成(女子)

育成 条件 有無 f %	30歳以上				一人で来た			
	受けた		受けない		受けた		受けない	
	f	%	f	%	f	%	f	%
I	17	77.3	20	31.7	8	66.7	5	27.8
I以外	5	22.7	43	68.3	4	33.3	13	72.2
計	22		63		12		18	

Iは表3に同じ

表7 マナーや協力に関する指導と利用時間(累積度数)

利用時間 性 有無 f %	男				女			
	受けた		受けない		受けた		受けない	
	f	%	f	%	f	%	f	%
3時間以上	1	9.1	3	9.4	2	6.9	3	3.4
2時間以上3時間未満	8	72.7	18	56.3	18	62.1	48	54.5
1時間以上2時間未満	11	100	29	90.6	28	96.6	84	95.5
30分以上1時間未満			32	100	29	100	87	98.9
30分未満							88	100
計	11		32		29		88	

表8 マナーや協力に関する指導と利用頻度(累積度数)

利用頻度 性 有無 f %	男				女			
	受けた		受けない		受けた		受けない	
	f	%	f	%	f	%	f	%
1週間に2日以上	2	16.7	4	12.5	8	27.6	23	26.1
1週間に1日ぐらい	9	75.0	21	65.6	24	82.8	69	78.4
2週間に1日ぐらい	12	100	26	81.3	28	96.6	77	87.5
1ヶ月に1日ぐらい			31	96.9	28	96.6	85	96.6
それ以下			32	100	29	100	88	100
計	12		32		29		88	

検討した結果、男子では20歳以上の者、女子では30歳以上の者及び一人で来た者について育成Iとの関係が顕著に認められた。この結果は、前述1)でもともと自主性がない者の特徴として明らかにされた主体的条件とほぼ同じであり、大いに注目すべき点であろうと考える。この中でも、特に30歳以上の女子の場合は指導方法がいずれであっても、即ち、利用者の求めに応じた指導であっても指導者側からの積極的な指導であっても、育成Iとマナーや協力的態度に関する指導との関係は有意であるとの結果も得られた。

しかも、マナーや協力に関する指導を受けて自主性が育成された、つまり、指導を以前ほど必要としなくなったということの裏には、指導者に対する拒絶反応があって、指導者及びその指導から逃避しているのではないかとの推測も可能になるわけであるが、運動者行動との関係をみたところ表7、表8のようであった。即ち、利用時間、利用頻度ともにそれらの指導を受けた者の行動は体育経営にとって好ましい傾向すらうかがえ、決して悪くはなっておらず、少なくとも表面に現われる運動者行動に関しては、マナーや協力的態度に関する指導はマイナスには作用していないと考えてよいと思われる。

表9 自主性と利用頻度（女子）

利用頻度 f %	自主性等		もともとの自主性なし			
	もともと自主性あり		ア		イ	
	f	%	f	%	f	%
1週間に2日以上			31	26.1	1	5.3
1週間に1日ぐらい	23	88.5	62	52.1	10	52.6
2週間に1日ぐらい			12	10.1	3	15.8
1ヶ月に1日ぐらい	2	7.7	10	8.4	1	5.3
それ以下	1	3.8	4	3.4	4	21.1
計	26		119		19	

ア：指導を受けたことがある者

イ：指導を受けたいが受けたことのない者

表10 自主性の育成と利用時間
(技術や練習法の指導を受けた女子)

利用時間 f %	育成		I		II	
	f	%	f	%	f	%
3時間以上	2	4.3	2	3.0		
2時間以上3時間未満	31	67.4	32	47.8		
1時間以上2時間未満	44	95.7	65	97.0		
30分以上1時間未満	45	97.8	66	98.5		
30分未満	46	100	67	100		
計	46		67			

I, IIは表3に同じ

累積度数

3) 自主性の有無及び育成と運動者行動

まず、自主性の有無と運動者行動の関係についてみたところ、表9のように女子で週2日以上の頻度で利用している者は全員、もともとの自主性がなかった者であり、しかも、そのほとんどが指導を受けたことのある者であり、指導と利用頻度との間に体育経営上の好ましい関係があることがわかる。

また、自主性の育成と運動者行動との関係については、表10のように、同じく運動技術や練習法の指導を受けても、自主性が育成されたと考えられる者(育成I)と、体育経営としては好ましいが自主性が育成されたとは判定できない者(育成II)とがあり、IIになった者よりIになった者のほうに2時間以上の利用者が多いことも5%水準で明らかになった。育成IIの具体的内容の中には「利用時間が長くなった」者も含まれており、そのIIよりもIのほうに利用時間が長い者が多いということは、自主性を育成することがいかに体育経営にとって大切であるかを示すものといえよう。しかも、両者の間には主体的条件の差が5%水準でみられなかったことから、育成Iになるか育成IIになるかは指導内容の違い、即ち、前述の指導内容と自主性の育成のところでも触れたように、マナーや協力的態度に関する指導プラス他の指導、つまり、ここでの問題としては運動技術や練習法の指導に加えてマナーや協力の指導を行うことが、育成Iに有効なのではないかとの予測は十分成り立つと考えられる。

さらに、自主性の育成と運動者行動との関係を直接的にみた結果、男子では5%水準で有意な関係はみられなかったが、女子については図2、図3のように、自主性が育成されたと考えられる者のほうに5%水準で2時間以上の利用者が多いこと、自主性が育成されなかったと考えられる者のほうには5%水準で週1日以上での利用者が少ないことが明らかになった。つまり、自主性が育成されると長時間利用者になり、指導を求めるようになったからといって高頻度利用者になるわけではないということであり、指導を求めるようになったトレーニング

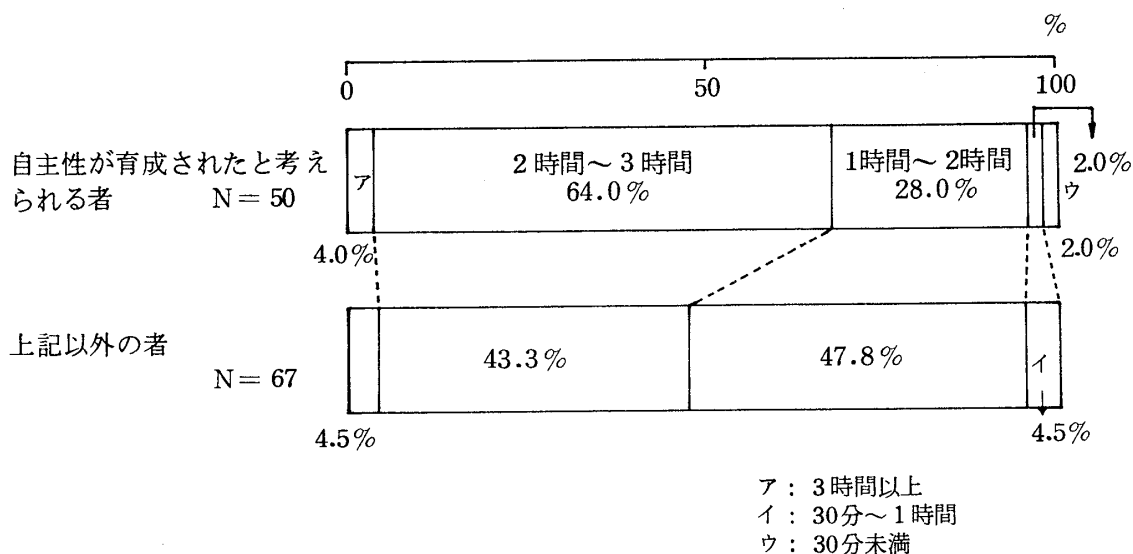


図2 自主性の育成と利用時間 女子

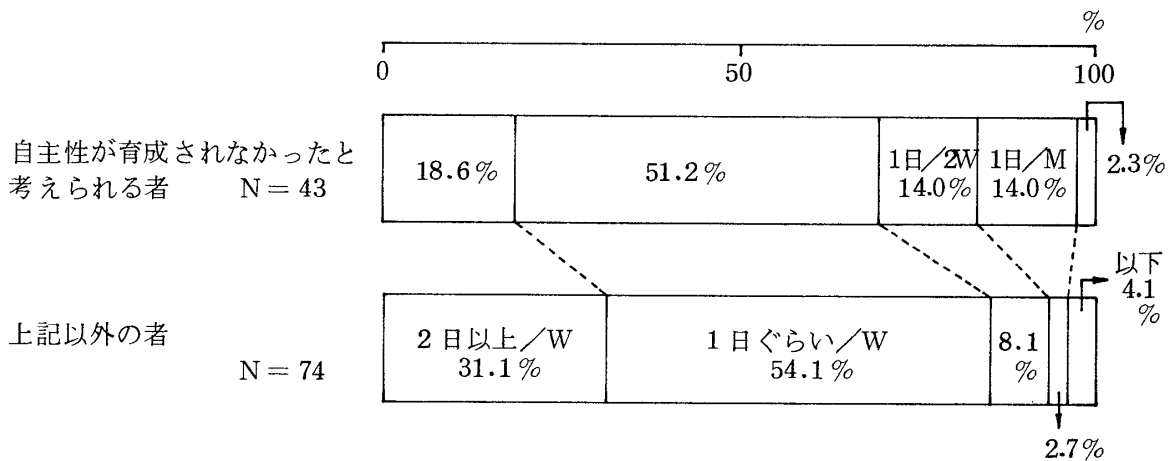


図 3 自主性の育成と利用頻度 女子

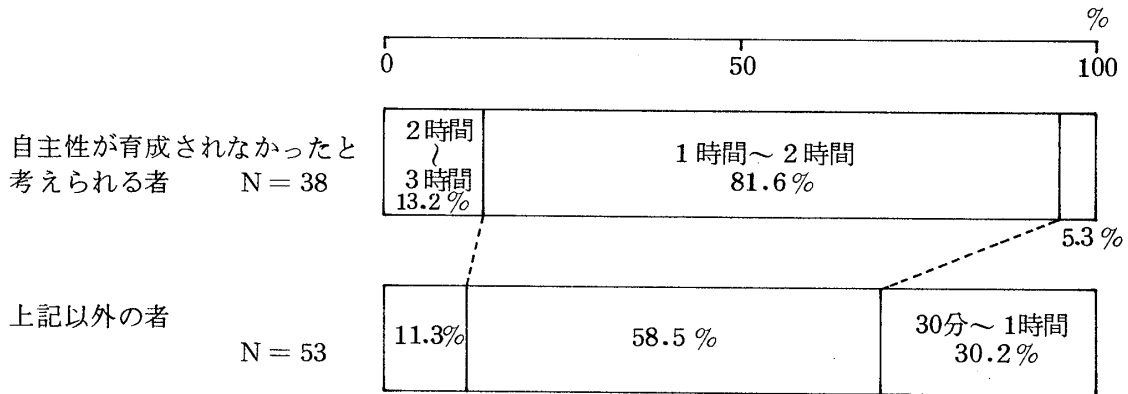


図 4 自主性の育成と利用時間 (トレーニング 女子)

・ルーム利用者に1時間以上の利用者が多いことは、ある意味で逆の傾向がみられた。即ち、現時点においては、指導者及び指導の魅力が運動者行動に及ぼす影響はバドミントン・卓球よりもトレーニングのほうが強いということであるが、詳細にはもう少し吟味する必要があるかと考える。また昨年の研究では、自主性の育成は遠くからの利用者にも機能するとの結果が得られたが、本研究においては所要時間30分までが一つの区切りとなっており、このことについても、種目の違いを考慮しながら今後検討しなければならないと考える。

< 結 語 >

以上をまとめると、エリア・サービスに配置された指導者は、一人で来た利用者、さらに男子は20歳以上、女子は30歳以上の利用者に焦点を当てて指導を行うことが望ましく、その際の指導内容としては、現段階では、運動技術や練習法だけでなく、それにマナーや協力的態度に

関する指導を加えることが自主性の育成には有効であること、これはトレーニング・ルーム利用者の場合と同様であること、自主性が育成された者は運動者行動の面でも体育経営上好ましい傾向がみられ、もっと指導をしてほしいという育成Ⅲになっても必ずしも利用頻度が高まるわけではないことが明らかにできたと考える。つまり、エリア・サービスに指導者を配置し、しっかりとした指導を行うことは、利用者の自主性を育成し、そのことは利用頻度を中心とした運動者行動に好影響を及ぼすことが明らかにできたとし、そのような指導ができる指導者を選ぶことの大切さも明らかにできたとと言える。

また、今回、特に女子についてはいずれの指導方法であっても指導内容によっては自主性が育成されるとの結果が得られたが、昨年のトレーニングの場合には、指導者側からの積極的な指導は完全な自主性の育成にはつながらないという結果であった。ここに、トレーニングと卓球・バドミントンという種目の違い、利用者がそれらの運動を行う時にもつ意識の違い、さらには、指導者がそれらの指導をどう考えているかの違いといったことが大きく現われていると考えられる。

以上、本研究は所期の目的をほぼ達成したといえる。しかし、残された問題も多く、それらの解決によって本研究を深めることが今後必要となろう。そこで考えられる2、3の研究課題を示して本研究のまとめとする。

まず、利用目的のおさえ方の問題がある。これまでの研究では利用目的はクラブの練習としての利用か、クラブ以外の目的での利用かでとらえてきた。それは、利用者の中から純粋にエリア・サービス利用者といえる者を抽出するためのとらえ方であり、それなりの意味はあったし、今後もその必要性はあると考える。しかし、クラブ以外の目的であったとしても具体的に何を求めて利用しているかによって指導のあり方は変わってくるであろうことから、今後は利用者が何(上手になること、汗をかくこと……)を楽しんでいるかといったことにアプローチできるような利用目的のおさえ方をする必要もあると考える。

また、運動技術の指導という場合にどの程度の技術レベルかについても問題にする必要があろう。つまり、エリア・サービスの指導者は初歩的技術を指導すればよいのか、それともかなり高度な技術指導までも要求されるのかの問題である。このことを明らかにすることによって、エリア・サービスの指導者として備えるべき資質の一部が把握できるであろうし、体育経営体が指導者を選ぶ際の目安ともなろう。

さらに、前述のように距離的動員機能と自主性の育成との関係についても、いま一步踏み込んだ分析・検討が必要であろう。

参 考 文 献

- 1) 井関・村田・吉田「消費者行動の理論」 1969.12 丸善。
- 2) 松田・宇土編「新版 現代学校体育大事典」 1981.5 大修館書店。
- 3) 中村平「運動施設の誘致距離に関する研究 — 公営体育館の体育経営」 体育学研究第22巻第2号 pp.93-100 1977.7。
- 4) 中村平「運動施設の誘致距離に関する研究 — 地域体育における施設経営」 体育学研究

第24巻第2号 pp.117-125 1979. 9。

- 5) 中村平「地域体育における施設経営に関する研究」 東京女子体育大学紀要第16号 1981. 3。
- 6) 中村平「地域体育における施設経営に関する研究(2)」 東京女子体育大学紀要第17号 1982. 3。
- 7) 清水晶「新商店経営学」 1977. 7 中央経済社。
- 8) 竹之下・松田他著「体育科学習指導の研究」 1972. 9 光文書院。
- 9) 宇土正彦「現代保健体育学大系5 体育管理学」 1970. 11 大修館書店。
- 10) 宇土・八代・中村・佐藤「社会体育指導者に関する研究 — とくに求められる能力, 知識, 指導行動について」 筑波大学体育科学系紀要第2巻 pp.1-14 1979. 3。
- 11) 八代・中村・片山「公営体育館における運動者行動に関する研究」 東京教育大学体育学部紀要第15巻 pp.29-37 1976. 3。

A Study on the Management of Sports and Physical
Recreation Facilities in the Community (Part 3) :
the function of sports leader for the public in
badminton and table tennis

Taira Nakamura

Abstract

Area Service is one of the functions that a sports facility may provide. Sports leaders, as a part of the Area Service, would develop autonomic behavior of the participants under certain circumstances. The purpose of the study, therefore, was to investigate the relationship between the role of the sports leaders and the responses occurred on the users' side.

For this purpose, a questionnaire survey was administered among the users of Area Service in badminton and table tennis that were provided by two public sports halls as independent bodies of physical education and sports management. Development of user's autonomy was measured in terms of how the participants' consciousness changed by interaction with the sports leaders, and were classified as follows:

- 1) Those for whom sports leaders' guidance became unnecessary,
- 2) Those to whom clear evaluation was not possible, and
- 3) Those who still need such guidance.

Contents of sports leader's guidance activities were then classified as follows:

- a) teaching sports skills,

- b) method of practice
- c) sports rules and/or method of referee,
- d) desirable manners and cooperative attitude in public facility, and
- e) exercise prescription.

The results of this study lead the conclusions as follows:

- 1) Many of the participants unaccompanied by friends, males over twenty years, and females over thirty years of age have a tendency to ask for the sports leader's guidance when they take exercise in Area Service. The author is of the opinion that they are not autonomous.
- 2) Teaching desirable manners and cooperative attitude in addition to teaching sports skills and practical method may be effective in development of the autonomous attitude of the participants.
- 3) Users who acquired autonomous attitude have a desirable tendency for management of physical education and sports. Namely, they have greater number of hours and/or higher frequency of facility usage.